

## 淫穴主将猛の跳ね駒神事

高坂猛は緊張していた。

これから、丈翼大学剣道部主将として初めての行事、いや、神事が待っているのだ。

無様を晒すわけにはいかないと心も身体も引き締めている。

伝統ある丈翼大学剣道部には主将継承を内外に顕示する神事があり、毎年行われている。

その名は跳ね駒神事。

暴れ馬を乗りこなすことで武芸の腕を示す伝統ある神事だ。

最も、近年では暴れ馬を運用することへの危惧からロデオマシーンで代用されているが、この神事の意義が薄れたわけではない。

猛は、伝統ある丈翼大学の剣道部主将として、この神事を無事にやり遂げねばならないのだ。

今の猛の姿は雄の魅力を最大限に発揮する姿であった。

腰に赤褌を締めているだけの姿は猛の勇壮な肉体の魅力を高めている。

色白の肌は虚弱さではなく筋肉質の身体と相まって西洋彫刻のような色気を漂わせている。

その腰に締められた赤褌は、西洋彫刻のような猛の肉体美に和の魅力を加えている。

西洋と和の魅力が競い合いつつ調和している猛の肉体は雄の究極の一つと言っても過言ではないだろう。

そして、猛の股間では赤褌のもっこりが目立っている。

ペットボトル早漏チンポを収めたもっこりは、常人のもっこりとは違い、そこに雄の武器が備わっていることを如実に示している。

たとえ、その実態が極度の早漏であるとはいえ、猛のチンポの大きさもまた立派な雄の魅力を湛えていることを赤褌のもっこりが主張しているのだ。

無様を晒すわけにはいかない。

猛は己の尻を手で叩いて気合を入れた。

その拍子に猛の雄肉が充溢する尻肉がぶると震える。

猛の尻は赤褌を咥えこんでおり、大和男児のありようをその尻で示している。

これほどまでに立派な雄が高坂猛なのだ。

跳ね駒神事など難なくこなせるだろうと、多くの剣道部員たちが考えている。

けれど、猛には一つだけ不安があった。

猛は過去に、ロデオマシーンで絶頂射精をしたことがあるのだ。

ロデオマシーンの振動にアナルセックスの快楽を思い出した猛はロデオマシーンから落ちることはなかったが、淫らな身体が妄想チンポに欲情してパンツの中に何度も何度も射精をしてしまったのだ。

あの時はズボンも穿いていたのでザーメンを何度もぶっ放したことを周囲の観客に悟られることはなかったが、今回は赤褌一枚という姿だ。

勃起をすれば隠しようがないし、絶頂してしまえば赤褌からザーメンが溢れ出してしまうだろう。

仮に赤褌からザーメンが噴出することを防げたとしても、猛のザーメンは他の男たちの

ザーメンに比べて濃く、雄臭い。

射精をすればザーメンを誤魔化しても臭いまでは誤魔化せないだろう。

猛はアナルセックスが大好きなケツマ○コの奴隷だが、恥を感じないわけではない。

跳ね駒神事を観覧しに来る多くの観衆の前で射精するところを見られたらと思うと、恥ずかしさと居たたまれなさで震えてしまう。

けれど、猛は跳ね駒神事から逃げようとは思わなかった。

この神事は伝統ある丈翼大学剣道部の重要な神事であり、猛が剣道部主将であることを内外に喧伝する大事な行事なのだ。

まさか、ロデオマシーンで絶頂してしまったことがあるので止めたいなどと言えるわけがない。

そんなことを言えば、猛を主将に選んだ丈翼大学剣道部の沽券にも関わることだ。

だから、猛はこの跳ね駒神事で絶頂射精をするわけにはいかない。

下腹部をきっちり締めて、二十分の神事に耐えなくてはならないのだ。

「お、猛。

準備万端じゃないか」

猛の親友であり、同じ剣道部に所属する成島泰輔が、猛が待機している控室に入ってきた。

「泰輔」

猛は泰輔の顔を見てほっとした。

凶太さに呆れるときもあるが、泰輔の陽気さは生真面目な性質の猛にとって清涼剤の役割を果たしているのだ。

今も、跳ね駒神事を前に緊張していた身体から力が少し抜けた。

「しかし、お前はずるいな。

顔はイケメン、身体もイケメン、その上赤禪が似合って、もっこりも最強。

もしも、早漏でケツマ○コの奴隷じゃなかったら、世の中の雄を絶望させる完璧超人だったよな」

泰輔が猛の西洋彫刻のような身体を舐め回すように見つめている。

「大袈裟だな、泰輔は」

猛は苦笑いを浮かべた。

セックスの相手を一人でイカせることもできずに絶頂を迎えてしまう重度の早漏であることを認識している猛にとって、己は男ではあっても雄ではない。

チンポを使うよりもチンポを使われる方が好きなケツマ○コの奴隷なのだから、そんな己が雄であるはずがない。

だから、世の中の雄を絶望させると言われても苦笑いを浮かべるしかないのだ。

「大袈裟なもんかよ。

お前を何度も抱いている俺が言うんだ、間違いなんてない」

泰輔が猛の尻をピシヤリと叩いた。

猛の雄肉が充溢した尻肉がぶるんと震える。

「跳ね駒神事、無事にやり遂げたらセックスチケット切ってやるから、お祝いセックスしようぜ」

泰輔がポケットからセックスチケットを取り出した。

セックスチケットとは、ケツマ○コの奴隷である猛が求められるがままにアナルセックスに溺れないように制定された制度で、この大学の男子学生の殆どがこの制度を認知している。

剣道部が定期的に発行するセックスチケットがなければ、どれだけ猛が欲しくてもアナルセックスを求めてはいけなく、猛もまた、アナルセックスをしてはいけなくのだ。

ケツマ○コを管理されている現状に猛は不満を抱いていない。

ケツマ○コの快楽に弱い己には、そのぐらいのことをしないと駄目だろうと自分でも考えているからだ。

泰輔が取り出したセックスチケットに猛は泰輔とのアナルセックスを思い出した。

女の子と長続きしないことが不思議なぐらい、泰輔はセックスが上手だ。

セックスできるチンポを等しく愛おしく思う猛の中でも泰輔チンポは上位に位置するグッドペニスなのだ。

きゅううん……

泰輔とのアナルセックスを思い出した猛のケツマ○コが切なく疼きだした。

猛の赤禪のもっこりも充血し始める。

不味い、と猛は思った。

これから跳ね駒神事だというのにペットボトル早漏チンポを勃起させては剣道部の面子にも関わる。

勃起しないでくれと猛は願う。

だが、チンポを意識すればするほど猛のペットボトル早漏チンポは充血し、赤禪のもっこりを大きく押し上げていく。

猛の赤禪のもっこりが大きく前方にせり出しながら突き上がった。

猛の上ぞり勃起チンポに押されて、赤禪が卑猥な形に変貌する。

「おいおい、勃起してるじゃん、猛。

自慢のチンポを見せびらかすのか？

剣道部主将の剛チンここにありってか」

泰輔がへらへらと笑っている。

「そんなわけあるか、馬鹿！」

猛は声を荒げた。

猛はチンポが大好きなケツマ○コの奴隷だが、恥を感じないわけではない。

剣道部にとって重要な神事である跳ね駒神事にチンポを勃起させて登場するだなんて、考えただけで身震いしてしまう。

「いやだって、男なら勃起するもんだし、猛のチンポは立派なもんだろ？

観衆だって、チンポが勃起しているぐらい、何とも思わないって」

「俺が、嫌なんだよ！」

泰輔の楽観的な言葉に猛は大きく首を振った。

早く萎えてくれ、と願うが、意識すればするほど猛のペットボトル早漏チンポがギンギンに勃起してしまう。

跳ね駒神事まであと十分もないのに、猛のペットボトル早漏チンポが萎える兆しを見せない。

猛は悩んだ。

チンポを自慢する趣味のない猛にとって、赤禪を締めているとはいえペットボトル早漏チンポが勃起した状態で人前に出るのはあまりにも恥ずかしい。

だが、意識すればするほど猛のペットボトル早漏チンポが勃起してしまう。

このままでは、猛は勃起チンポアピールをする変態主将に汚名を被ってしまう。

それだけは、避けなくてはならないのだ。

しばらく悩んだ猛は解決策を思いついた。

「頼む、泰輔。

俺の金玉を責めて、チンポを萎えさせてくれ」

猛は恥を忍んで泰輔に依頼をした。

跳ね駒神事の開始までにペットボトル早漏チンポを萎えさせるにはそれしか思いつかなかったのだ。

「分かったぜ、猛」

泰輔が頷き、猛の赤禪のもっこりを下からぐわっと掴んだ。

そして、ごりごりと指を動かし始めた。

「うぐっ……」

猛は前かがみになり呻いた。

泰輔の手の中で猛の金玉が責め立てられる。

泰輔の手が猛の金玉をぎゅっぎゅと握るたび、鈍痛が全身に広がる。

「ふくっ……はあ……」

猛は息を荒げ、イケメンな顔を鈍痛に歪める。

猛の下腹部では赤禪のもっこりが変形し始めた。

上向きに突っ張っていた赤禪のもっこりが徐々に下に移動し始めたのだ。

ごりごりと泰輔の手で金玉を責められるたび、猛の下腹部から脳天に向かって鈍痛が割れ鐘の音のようにいびつな音を立てて響いていく。

頭がくらくらし、全身の神経が悲鳴を上げる。

男として最悪の苦痛だ。

だが、猛はその鈍痛に安堵していた。

鈍痛と共に己のペットボトル早漏チンポが萎えていく感触に、猛は苦しみと共に安堵を覚えたのだ。

これで、勃起チンポを見せびらかすような赤禪のもっこりを晒さずに済むと思うと安心できるのだ。

「そら、こんなもんでいいだろ」

泰輔が猛の赤禪のもっこりから手を放した。

猛のペットボトル早漏チンポはすっかり萎え、赤禪のもっこりも平常のポジションに戻っている。

「ああ……助かったよ……」

鈍痛に呻く金玉を赤禪の上から撫でまわしながら猛は泰輔に礼を言った。

猛の赤禪のもっこりはずっしりとした平常のポジションに戻っており、勃起の痕跡など見当たらない。

これならば、跳ね駒神事に安心して挑めるというものだ。

「じゃあ、跳ね駒神事、頑張れよ」

泰輔にぴしゃりと尻を叩かれ、猛は大きく頷いた。

「ああ、剣道部主将として相応しい幕開けにしてくる」

そして、猛は控室から歩き始めた。

猛は剣道部寮の前に置かれたロデオマシーンに向かって歩き始めた。

「おお、あれが新主将の高坂くんか」

「中々の男ぶりじゃないか」

「高坂くんが穿いていると赤禪もかっこいいよね」

「ほんと、高坂くんかっこいいよね」

老若男女様々な観衆の声に猛は照れ臭くなった。

だが、ここで照れていては剣道部主将としての威厳が損なわれるだろう。

猛は顔を引き締め、神主が傍に控えるロデオマシンの前まで歩いた。

そして、観衆たちを見回し、一礼した。

「このたび、剣道部の新主将に任命されました、高坂猛です。」

この栄光ある剣道部の歴史に泥を塗らぬよう、精進してまいりますので、なにとぞ、ご支援、ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします」

猛の挨拶に観衆たちが盛大な拍手を返した。

その拍手が治まるのを待ってから、猛は声を上げた。

「剣道部新主将として、これから跳ね駒神事に挑ませていただきます。」

どうか、見守っててください」

そして、猛はロデオマシーンに跨った。

ロデオマシンの鞍に押されて、猛の赤禪のもっこりがむにゅっと変形した。

「では、跳ね駒神事を始めます」

神主がロデオマシンのスイッチを入れた。

ぐうういいいいいいいいん！

ロデオマシーンが勢いよく動き始めた。

猛はロデオマシンの鞍の動きに腰を合わせて、順調に乗りこなす。

「流石新主将。」

見事な乗りこなしじゃないか」

「あの腰の動き、中々の物だな」

「高坂くん、素敵……」

「本当、馬術もできるなんて凄いよね」

観衆たちが猛の乗りこなしに称賛の声を上げる。

だが、猛はその称賛を素直に受け取る余裕はなかった。

ロデオマシンの鞍が会陰部に与える振動を受けて、猛の身体が、ケツマ○コが、アナルセックスの記憶を反芻し始めたのだ。

ロデオマシーンが猛の会陰部を突き上げるたび、猛はケツマ○コを突き上げるチンポの

感触を思い出してしまう。

これまでに猛の身体を通り過ぎて行った様々な男たちの力強さ、雄の腰遣い、チンポの大きさや感触が猛の全身に思い出されていく。

アナルセックスの熱を思い出し、猛の全身がうっすらと汗を滲ませ始める。

健康美を誇る猛の筋肉質の身体が艶を帯び、ほんのりと淫靡さを香らせ始める。

「流石の高坂くんもロデオマシーンが相手では汗をかくのだね」

「健康的な剣道青年の汗も中々そそるね」

「必死にロデオマシーンに乗る高坂くん、色っぽい……」

「なんだか、エッチだよ、高坂くん……」

観衆たちも猛の変化を嗅ぎ取っている。

喘ぎ声が猛の腹から湧き上がろうとしている。

猛は歯を食いしばってその喘ぎ声を押し殺す。

跳ね駒神事で喘ぐなんて、猛の羞恥心と自尊心が許さなかったのだ。

だが、喘ぎ声を押し殺せば押し殺すほど、腹の中に溜まった喘ぎ声が媚熱となって全身をじりじりと焼いていくのだ。

淫乱な熱に焼かれ、猛の身体は汗に濡れていく。

清廉なる神事であるべき跳ね駒神事に、淫靡な香りを漂わせていく。

猛の頭の中の半分は無事に跳ね駒神事を終わらせることを覚えているが、もう半分はアナルセックスの記憶に溺れている。

雁首がケツマ○コをひっかく感触、ケツマ○コを押し広げるチンポの硬さと熱、尻肉に打ち付けられる雄の下腹部の躍動……

アナルセックスの記憶が次々に溢れだし、猛の身体を情欲に染め上げていく。

「うう……ああ……くう……」

猛の口から喘ぎ声が漏れ始める。

猛は己の口を押えて喘ぎ声を封じておきたかったが、会陰部を激しく刺激するロデオマシーンに乗っている状況で片手を放すことは無理な相談であった。

猛の顔が羞恥に赤く染まっていく。

ロデオマシーンでアナルセックスを思い出していることに恥を覚えているのだ。

「おや、顔を赤くして必死だね、高坂くんは」

「ロデオマシーン相手に必死なんだろうね」

「どうしよう……ドキドキしてきたわ……」

「裸じゃないのに、なんだかエッチだよ、高坂くん」

猛の喘ぎ声はまだ小さく、ロデオマシーンの駆動音に紛れて観衆たちの耳には届いていないはずだ。

それでも、観衆たちは猛の変貌を嗅ぎ取っていた。

清廉であるべき跳ね駒神事に淫靡という異物を猛が持ち込んでいることを無意識のうちに悟っているのだ。

ロデオマシーンの動きが変化した。

打ち付けるようなラッシュに、猛はボクシング部の男たちのセックスを思い出した。

同じスポーツに打ち込んでいるからだろうか、同じ運動部の男たちのセックスには独特

の癖が共通していた。

チンポという拳を武器に猛をノックアウトさせようとするボクシング部のアナルセックスを思い出し、猛のケツマ○コはきゅんきゅんと疼く。

今、チンポが収まっていないことが不思議なほど、猛のケツマ○コは疼いていた。

そして、その疼きは猛の赤禪のもっこりも変化させ始めた。

ロデオマシーンの鞍に乗っかるように鎮座していたもっこりが徐々に鋭角になり、赤禪をぐいぐいと持ち上げだしたのだ。

不味い、猛の一部は思った。

猛の記憶は混濁し、ロデオマシーンに乗りながら男たちとセックスをしている状況なのだ。

己のペットボトル早漏チンポが勃起していることは自覚できても、それを止めるような方法は思いつかなかつたし、アナルセックスの記憶に溺れている猛の半分は、ペットボトル早漏チンポが勃起していることを当然のことと受け止めていたのだ。

「おやおや、若いねえ、高坂くんは」

「ロデオマシーンで勃起するとは、欲求不満なんでしょうなあ」

「高坂くん、おちんちん、大きいのね……」

「赤禪を押し上げる形もエッチだよ」

観衆たちも猛のペットボトル早漏チンポが勃起していることに気がつき始めている。

猛の全身がアナルセックスの記憶とロデオマシーンの振動で汗に濡れていく。

猛のつま先から汗がポタポタと垂れ始める。

濡れているのは猛の筋肉だけではなく。

猛の赤禪のもっこりもその頂点から濡れ始めていた。

鈴口から我慢汁が溢れだし、赤禪の漢ぶりを汚し始めたのだ。

健康美を誇る猛の肉体は、ロデオマシーンを触媒にした妄想アナルセックスですっかりその淫蕩な本性を露わにってしまったのだ。

「うう……おお……うううう……」

猛の口から押し殺した喘ぎ声が溢れ出す。

猛の一部が、この場で喘いではならないと必死に歯を食いしばっているのだ。

だが、猛の大部分はロデオマシーンの振動を触媒に想起されるアナルセックスの記憶に溺れている。

妄想チンポでケツマ○コを蹂躪される悦びにきゅんきゅんと疼いているのだ。

猛は今、サッカー部とのアナルセックスの記憶に溺れている。

強い脚力から生み出される高速ピストンの激しさを思い出して空っぽのケツマ○コが激しく痙攣しているのだ。

猛の全身が汗で濡れて卑猥な艶を増していく。

猛の赤禪もまた我慢汁に濡れて猛のペットボトル早漏チンポの形を強調し始める。

もはや、清廉な神事などこの場には存在しなかった。

この場は、健康美を誇っていた剣道青年がロデオマシーンと妄想アナルセックスをしている様子を披露する場と化していたのだ。

それでも、猛の一部は必死に声を押し殺そうとする。

だが、押し殺した声は腹の中で媚熱となって全身をじりじりと焦がしていく。

その熱が快感となって猛を追い詰めるのだ。

猛の記憶の中のアナルセックスが混在し始める。

猛はサッカー部男子に犯されながらバスケットボール部のチンポでケツマ○コにダンクシュートを決められている。

猛のケツマ○コがチンポの不在を嘆いてきゅんきゅんと疼いている。

妄想の中のチンポでは満足できずに現実のチンポの硬さと圧力と熱を求めて疼いている。

「ああ……おおおん……はああああん……」

とうとう、猛の口から喘ぎ声が溢れだした。

快楽に削られた猛の自制心が耐えきれなくなったのだ。

猛のほんの一部は清廉であるべき跳ね駒神事を汚してしまう恥辱に震えている。

だが、猛の大部分はロデオマシーンとの妄想セックスの快楽に溺れ、快楽を享受しようとしている。

会陰部に加えられる振動を浅ましく貪り、前立腺を震わせている。

挿入こそしていないがセックスをしているようにしか見えないのが今の猛なのだ。

全身は汗に濡れて淫靡な艶で滑り、本来ならば漢ぶりを象徴する赤禪はフル勃起したペットボトル早漏チンポの形に歪み、我慢汁で濡れている。

猛の顔も快楽に蕩け、ロデオマシーンと交尾しているという現実を見る者に突き付けている。

観衆たちは言葉を失い、猛の淫姿に見惚れている。

男たちはズボンに TENT を張り、女たちは切なそうに内股になっている。

「ああああん……イイ……おかしくなるうう……」

猛は恥も外聞も忘れて喘いでいる。

羞恥に震える心が猛の片隅に押しやられている。

猛のほぼすべてがロデオマシーンとの妄想アナルセックスを愉しみ、チンポの不在を嘆いているのだ。

「おおおおおん！」

ひときわ深い快楽が会陰部から爆発し、猛は背を仰け反らせた。

チンポ……チンポが欲しい……

ケツマ○コの疼きを鎮めるチンポが欲しい……

はしたない俺のケツマ○コを舐めてくれるチンポが欲しい……

硬く、熱く、俺のケツマ○コを変形させるチンポが欲しい……

チンポ……ああ……チンポお……

チンポチンポチンポチンポチンポチンポ！

チンポお！

チンポがほしいiiiiii！

ケツマ○コが疼いて頭がおかしくなりそうだ！

チンポがないとおかしくなっちゃう！

チンポ！ チンポお！

誰でもいいから俺のケツマ○コにチンポをぶちこんでくれええ！  
ケツマ○コの疼きを鎮めてくれよおおお！  
チンポチンポチンポチンポチンポチンポ！  
アナルセックスできるチンポなら誰でもいいからチンポをくれええええ！  
チンポで俺を助けてくれよおおおおお！  
チンポ！ チンポお！  
ケツマ○コの空虚に耐えられないんだ！  
チンポがないと気が狂いそうだ！  
チンポが欲しい！ チンポをぶちこんでくれ！  
俺のケツマ○コの中で空っぽになるまでザーメンをぶっ放してくれよお！  
チンポを抱きしめたいんだ！  
俺のケツマ○コでチンポを抱きしめて絶頂したいんだ！  
チンポがないと俺はおかしくなる！  
チンポが欲しい！ チンポをくれ！  
俺のケツマ○コにチンポをぶち込んで犯しまくってくれ！  
ああ！ チンポお！  
チンポチンポチンポチンポ！  
チンポ最高！ チンポ万歳！  
チンポこそ俺の全てだ！  
俺のケツマ○コを救ってくれるのは雄々しく勃起したチンポだけだ！  
チンポが欲しい！ チンポをぶちこんでくれ！  
俺にはチンポが必要なんだ！  
今すぐチンポをぶちこんでくれよおおおおお！  
ケツマ○コが狂いそうなんだ！  
チンポを抱きしめたくてケツマ○コがおかしくなりそうなんだ！  
チンポがないと俺は駄目になっちまうんだ！  
チンポチンポチンポチンポチンポ！  
チンポを俺にぶちこんでくれよおおおおお！

「あひiiiiiiiiiiiiiiiiん！」

ロデオマシーンとの妄想アナルセックスに溺れながら、猛の心は卑猥な言葉を喚き続けている。

もしも、この言葉が観衆たちに聞こえていたのならば、男たちは己のチンポで猛をぶち犯し、女たちはペニスバンドを装備して猛のケツマ○コを舐めてやっただろう。

猛の口が喘ぎ声しか出せないほどに追い詰められていることは、清廉なる跳ね駒神事という体面を守る意味では意味があることであった。

んんんんんんんんんん！  
クる！ ヤバいものがクる！  
ああ！ 駄目だああああ！

チンポでイきたいいいいいいいい！  
空っぽのケツマ○コでイきたくないいいいいい！  
ヤバい！ ヤバい！ ヤバい！ ヤバい！  
ケツの奥からいっぱいくる！  
ああ！ ヤバい！  
空っぽケツマ○コでイっちゃうううううう！

「!!!!!!!!!!!!!!!」

猛は獣のように吠えた。  
絶頂を迎えたのだ、とその場にいた誰もが悟った。  
猛の赤禪のもっこりが別の生き物のように震えた。  
だが、ザーメンの臭いはしなかった。  
猛のザーメンは常人より量が多く、濃く、臭いもするというのに、ザーメンの臭いはまったくしなかった。  
猛はロデオマシーンとの妄想アナルセックスで、空っぽケツマ○コが空イきしたのだ。  
射精という終わりがない故、猛は獣のように吠え続ける。  
その姿は原初の快樂そのものであった。  
それでもなお、猛の剣道青年としての本能、いや、ロデオマシーンとの妄想アナルセックスを愉しむケツマ○コの奴隷の本性は、猛をロデオマシーンの上に留めた。  
全身を汗で濡らし、赤禪を我慢汁で濡らしながら、猛は空っぽケツマ○コで空イきし続けた。

「跳ね駒神事、これにて完了とする！」

神主の言葉と共にロデオマシーンのスイッチが切られた。

「あふう……あひい……」

猛はロデオマシーンの上で淫らな息を吐いている。

その顔はセックスの余韻に染まっていた。

「さあ、新主将。

締め挨拶をお願いします」

神主の言葉に猛は我に返った。

ギンギンに勃起したペットボトル早漏チンポが赤禪の中で窮屈そうにしている感触を認識する。

射精せずに絶頂を迎えたせいで全身に残る媚熱に神経が爛れている。

そして、己がロデオマシーンとの妄想アナルセックスで空イきしまくったことを思い出した。

快樂の余韻に染まっていた猛の顔が羞恥に赤くなる。

「新主将？」

神主が何事もなかったかのように猛に声をかける。

猛は己の身体を見下ろした。



## 奥付

『淫穴主将猛短編集』より「淫穴主将猛の跳ね駒神事」

初出：2022年12月30日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【pixiv FANBOX】

<https://may-gold.fanbox.cc/>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)